

十五歳の少女の戦中日記

『自彊簿』抄

新潟県立村上高等女学校三年

安藤道子

(現姓樋川)

はじめに 一 疎開一

昭和二十年三月末、父の故郷村上に縁故疎開。これは、その年小学校低学年も学童疎開することになり、弘は、六年を卒業で集団疎開から帰ってきたが、今度は洋子が集団疎開をしなければならぬことが、両親を縁故疎開に踏み切らせたと思う。三月十日の東京下町の大空襲で、誰もが切羽詰まった気持ちになっていた。次は何処かと、恐ろしい気持ちであった。とは言え、父は仕事を離れる訳にはゆかず、一度も夫の故郷に行つた事のない母が四人の子供を連れて見知らぬ夫の故郷で生活する覚悟を決めた気持ちはいかにかりだったかと今察するのである。母三十七歳、道子十四歳(五月には十五歳)、弘十二歳、洋子八歳、明子一歳であった。とにかく、二年間在籍した都立神代高女にも別れを

告げ弟妹もそれぞれ学校の手続きをして、荷物をどのように纏めたか切符をどうしたかなどは、定かではないが各自、身の回りの物を一わたしは鍋・釜をくるんだ風呂敷包みを持って、母は明子を背に負って、三月二十九日、上野駅から出発することになった。上野の駅は大変な混雑で行列して乗車の順を待った。いよいよ乗車と言うときに皆走りだして、わたしは、大きな鍋の包みを持って、ホームで転んだ。恐ろしかった。そのようにして乗り込んだ夜行列車には我々の席はなく、ぎゅうぎゅうの立ちっ放しの旅だった。

一ヶ月待たされて昭和二十年五月、県立村上高女三年二組に編入。「自彊簿」は一週間ごとに担任に提出する決まりだった。

(樋川道子)

「自彊簿」抄

昭和二十年五月七日 やっと一カ月の間の願望を遂げ、月曜日から登校出来ることになりました。嬉しくてなりません。家で毎日不規則な生活をしているより、余程張り合いがあります。国民学校(現小学校)時代から一度も転校をしたことのない私は、お友達の出来ないということが、なによりも心配でした。しかし、私の心配は、すぐに消えました。級長さん始め皆さんが、朗らかに親切にして下さいます。お机の廻りの人とはすぐに仲良くなりましたし、バレーの仲間にも入れて頂きました。私は本当に皆さんの親切に感謝しております。

五月八日 大詔奉戴日 (昭和十六年十二月八日天皇が宣戦の詔書を發布した日。毎月八日をごのように言ったり樋川)をこちらに来て二度迎えました。校長先生のお諭しにもありました通り欧州の戦局が終幕を告げた今日、必ず日本は、もっと苦しい試練に耐えなければならなくなるでしょう。来月の八日は、もっとも重大な戦局になるかも知れません。どんな事があっても最後の勝利は、我にありの確信を持って各自の本分を尽くそうと思いました。

五月十一日 午後、防空壕を掘りました。道具が足りないので、交代でしたが、まだ級に入ったばかりの私には、なかなか道具を貸して頂けませんでした。それで二時間に四回しかシャベルを持つことができませんでした。こういう時に積極的に出られない私の気持ちを、つくづく情けなくかんじました。もっと思ったことを気軽に言えるようになりたいと思いました。

自彊簿の書き方は、この様でよいでしょうか。

《先生評》 自彊簿はこれでよい。大変自分の心を打ち明けて自分の進む方向を明示しています。私も同感です。積極的たれですね。疎開という気持ちは取り去ってしまいなさい。みんな仲間です。一緒に死ぬ人達です。一緒に斬り込む人達です。つまらぬ遠慮は、しないでいいですよ。

五月十八日 地理の時間に今の重大な戦局についてお話しがありました。特別攻撃隊の隊員の方々の崇高な精神、また今上陛下の大御心を拝察して私は涙が出ました。家に帰ってから母や兄弟に話し、絶対にこれからは不平など言わないと申し合わせました。以前の学校で仲の良かった友達から手紙がきて滋賀県に疎開したのですが、まだ、学校に入れないで毎日一人で考えていると、東京のことばかり思い出して、淋しくなる

と書いてありました。その郷愁というものは私には経験がありますが、つまりは学校に出られないで退屈な時に起こるのだと思います。私もこちらに来た当座は東京が懐かしくて夜一人で泣いたりしたものです。でも学校に行くようになってからは、毎日が面白くてそんなに思い出して淋しがりたりする考えがなくなりました。

五月二十三日 中間審査が発表になりました。私は、何の学科も教科書がありませんし、こちらに入学した時にもうほかの人がすんでしまった所が出たら困ります。非常に心配です。しかし出来得るだけの努力をしてそれで駄目なら仕方がないと思って、お友達に本を借りて筆記をし最善の努力をしております。

五月二十八日 午後から父兄会がありました。母が出席しました。出勤及び健康状態について、お話があったそうです。私はこちらにきてから、体重が1kgばかり減りましたけれど、別に病気ではありませんし、所が変わったせいだろうと思います。七時の報道の時に、日本の新兵器、人雷機の特別攻撃隊の勇士に対する賞詞が、発表されました。ああ、何たる壮烈、わたしは感激して言葉ありませんでした。感謝の気持ちで胸が一杯になりました。それなのに、一緒に放送を聞

いていた階下の人達は、「同じく同じくって人の名ばかり言っている。つまらない」と笑ったり騒いだりしていました。此処らの人々は、東京のように戦いのほげしさが感じられないでしょうか、このような発表があってもさっぱり感じないようです。一軒の家の人の様子を見て多くを判じてはいけないことですが、とにかく先生のおっしゃるように、国民性の感情に欠けているとつくづく思いました。

六月一日 三時限と四時限に陸軍経理学校教官の方から「大東亜戦争の見通しと国民の覚悟」と言う題で、お話しを聞きました。今まで、よくわからなかった沖繩作戦だのアメリカの腹だのがはつきりわかってとても為になりました。家に帰りましたら、父から葉書が来ておりました。五月二十五日晚の敵襲で、私の家もとうとう憎い憎いアメリカの為に全焼したそうです。くわしいことはわかりませんが、先日こちらに来た（東京の）伯母が、焼け跡の整理のつき次第こちらに引き上げるつもりようです。父は、会社の都合で、どうなるかわかりません。いつかは焼ける家でした。何だかさっぱりしたような気がします。戦いがすむまで残っていればこんなよいことはないのですが、とてもそんなことは出来ませんから、今度はどうしたかしら

なんていう心配が無くなってよかったです。早く伯母が来てその時の有様を聞きたいと思えます。

《先生評》 戦いは言語に絶した姿だ。憎むべき敵の姿には齒軋りしている。然し任務は重い。与えられた分野を守り通すのです。齒をくいしばって。勝つ。必ず勝つ。我が国が欧米の復興に比較しては、十年二十年と言われるかも知れない。然し我が国は早い。国体が、優秀だから。然し自己の責務に邁進することだ。

六月四日 昨夜から末の妹がむずかかって熱が出だらしい。朝になったら、顔にぶつぶつが赤く出てきた。はしかだと思う。始終むずかかって母を離さない。仕方なく欠席して、炊事、片付けなどをした。今日は、何処でも、ちまきだの、草餅を作るのに大変だ。階下でも朝から大忙し。夕方は、家にもたくさんわけてくださった。夜になってから、隣組の組長さんが、わざわざ「洋子ちゃんに一つ」なんて持って来て下さった。本当に親切だ。私たちは、ますます行いをつつしんで、かりそめにも、「なんだあの東京から来た人達は」などと言われないようにしてはならない。

六月五日 妹は全身が赤くなって、あきらかにはしかである。昨日よりは、大分いいらしいが、相変わらず母のふところにはばかりくっついていて仕方がない。早

く登校しなくては皆に遅れるのにと気をもみつつ休む。午後から、母が昔、内藤様（旧村上藩主〓樋川）に上がっていた時のお友達がいらした。飯野に住んでいる人だ。私達をこちらに呼んでくれた親戚の人達はなにも世話をしてくれないで、かえって他人のこのお友達の方が度々お葉を分けてくれたり色々親身に心配してくれて有り難い。変なものだ。

六月七日 今日から私たち三年生は、松山（瀬波温泉の方の地名）に出動。二組は、鋏をかついで行った。あまり苦しい仕事ではなかったし、帰りにお湯に入ってきて本当によかった。（松山で、どんな作業をしたかは、覚えていない。松の根を掘って松根油の原料にしたのかも。何しろ帰りに何処かの浴場だったのか、狭い木の湯船に皆で賑やかにおしゃべりしたことは覚えている。〓樋川）これが作業だなんて済まない位。ただ、時々雨が降ったけれど。家に帰ったら父から手紙がきていた。野天の暮らすこと今日で四日などと呑気千萬なことが書いてある。

六月八日 朝、雨が降っていたけれど、作業があった。都合で松山には行かず、午前は校地内のさつまいもの移植だのヒマ、南瓜島の草とりをした。午後から、私達八人で、浅川先生のお家の開墾に行った。すこく

草の生えた荒地地なので、おこすのに大変だった。久しぶりに手に豆を作り労働の苦しみを少し味わった。

帰りに菊地さんのお家に寄って花を頂いた。

六月九日 学校の掲示板に「阿嘉島の子ら」の詩が書かれた。本当に我々の胸を打つ感激の詩である。あれに書かれたように何の疑いも持たずただ皇国の為に散った子らに「誰ぞ遅れむ」決してその子らの死を犬死にするような事があってはならない。私たちは本当に真剣なのだ。勝つ為にはどんな事でも耐える決心はついている。しかし、今の大人たち、殊にお母さんたちはとかく消極的で、戦局の不利を悲観しながら米が足りないのなんのと言って闇をするのは、たいがいお母さん方ではないかしら。私の母は闇はしないけれど、始終「どうなることかね」と悲しがついている。私から見ると、おかしいくらい。先日あの教官の方に聞いた有益なお話を、お母さんたちに直接話して頂いたらどうかしら。と思ってしまう。私が聞いたことを話してもあんまり感じないらしいのですもの。

六月十四日 菅沼に薪運びにいった。ずい分遠い所だ。あの坂の恐ろしかった事。忘れられない。荷車ごとたんぼに落ちたらどうしよう。帰りほとんど押し来たらなんだか行きより近いようにおもわれた。最近こん

なに歩いたことはない。

六月十六日 相変わらず安良町の、叔母たちが、わからないことを言って、いやな気持ちになる。瀬波に間借りしていた祖母は、今度二之町に越して来た。四間もある家に二人暮らしである。矢張り古くから、この町に住んでいる人にはかなわないとおもった。祖母と、親戚一同が決めた考えは、東京の伯母が、今来ても住む所がないから、家が、見つかるまで、来ないように言ってくれというのだ。東京がどんなにひどく、焼け跡のバラックに住んでいる人のことを知らないから、そんな悠長なことが、言えるのだ。私たちの所はいかにも狭いが祖母の家ならいくらも空いてる部屋があるのに、貸して上げるとは言わない。どんなに狭くても、私たちの部屋にだん然呼ぶことにする。

六月十九日 静岡に行かれた母の両親より安着の速達がきた。父が、決死の働きをしたおかげで、万事がよかったとききりにお礼の言葉が書いてある。猛火の中を、勇敢に働く父の姿が、目に浮かぶ。私の家の留守居に入った叔父は、近くのドブに、身を沈めて焼死を免れたとか。非常に危険だったらしい。

六月二十三日 母が、安良町の叔母に誘われて、どうしても笹の実を採りに行くと言うので、末の妹をお守

りする為に一日欠席する。私は、こんなことで休むのは心苦しくて仕方がないのだが、母は「大切な食糧を得るためだ」と無理に休ませられてしまった。朝の六時から午後三時頃まで妹と暮らした。母がいなければいけないで、おとなしくしているの、ほっとする。

六月二十五日 夜の報道で、沖繩の将兵の通信が途絶えた事を知った。ますます戦局は、苦しくなってくる。私たちは、この最後のふんばりをしっかりして、決して玉砕された多くの英霊の死を大死にしないように努力しなくてはならない。(将兵のことを言って民間人の死にふれていない。樋川)母の笹の実採りは非常な熱心さで、火曜も木曜も休まねばならなかった。なんだか心苦しくていやだ。父からきた葉書の隅に「近く村上に現れるよ」と書いてあったので、嬉しくなった。六月二十八日 今日月末の妹の誕生日だった。たった一つとっておいた缶詰を開けてお祝いする。夕方薄暗くなってから、駅から電話。父が着いたのだ。早速こどもだけで、駅へ行った。あまり早かったの、びっくりしたり、喜んだり。父は、明子が大きくなったので、びっくりしていた。三カ月はなれているとそんなに成長して見えるのかしら。おみやげは明日にして、戦災にあった日の話をきいた。とてもとても、恐

ろしかったらしい。皆生きていたのが、不思議な位だと聞いて、つくづく無事だったことをよろこんだ。

六月三十日 大場沢まで、徒歩で笹の実採りに行った。暑くて、遠くて、本当に死にそうだった。皆に日に焼けたと言われた。笹の実は、とてもよいのがたくさんあったけれど、あまり採ると、帰りに歩けないので、やめてしまった。(これも学校の勤労動員。樋川)

七月二日より八日まで 父が来て、色々家の事を交渉して下さったのだが、どれもおことわりの返事が来る。どこでも子供四人連れと言うので、いやなのらしい。母はもうさがすのは、失望をまずばかりだからよそうとさえ言い出した位だったのに、父が、いよいよ帰るといふ五日になって、前に頼んであった渡辺さんから、電話があつて、もと、女学校の書記をしていらして、今は中学にいらっしやる岸先生のお宅のお部屋を貸して頂くことに決まった。そこは、二之町で、閑静であるし島は貸して頂けるし、蚕室を境に、岸さんとは全然関係なく、台所さえ突き出しに作ればまるで別の家にする事ができる。とてもとてもうれしい。父が、帰京を一日延ばして、材木の手にほん走して下さった。

七月十日 新潟県立村上高女学徒隊の結成式が、行わ

れた。愈々私たちも皇国を守る軍人である。しっかり規律ある行動をとって作業に授業に努めよう。

七月十三日 先生より横河電機は、芝浦電機と共に日本の大切な電機会社であるから、(体育館に疎開してきているとは「樋川」) 決して言いふらさないようにとのお話しがあった。私は東京で、芝浦の車輛製作所に動員され、今また横河に出勤出来て実に嬉しいと思った。五時限で放課になり帰宅したら、米沢のお友達から手紙が来ていた。

七月十七日 お昼少し前、空襲警報が発令された。その少し前に爆音がしていたけれど、今考えると、あれが敵機だったらしい。小型機十機が来たそうだ。ずいぶん皆さわいでいたけれど、このような場合には、静かにしていないと爆音も情報も聞こえないし、状況判断を非常に邪魔すると思った。坂町がやられたとのこと、初めての艦上機の来襲であったのにたいした被害もなかったようで、よかった。

七月二十四日 天候が回復して今日は二日目、又空襲様が変わらぬうちに今日、急に岸さんの家を掃除することにした。一時間だけで早退をして妹のお守りを引き受け、母が一人で掃除に行った。午後からは、弟も四時間ですんだとか、早く帰って来たので手伝いに

やった。母や弟の帰っての話を聞けば聞くほどよい家である。出来るだけ早く移った方がよいというので、金曜日に弟が考査の中休みがあるのを利用して引っ越すことに決めた。

八月十二日 今日より少しの間夏休み。誰もかれも汗みどろで働いているのに、お休みがあつてなんだか心苦しいような気がする。一生懸命母の手助けをしようと思った。九時から町葬があるので、町校(村上町小学校「樋川」)に行った。午後からは、妹を連れて河にいった。妹の体中に出来ている湿疹も毎日河で泳がせたら少しづつよくなってきたようなので、熱心に連れて行くことにした。三時過ぎ帰宅した。

八月十三日 お盆に入った。道を歩いてもお花を持って墓参に行く人に多く会う。私たちも、こちらに来て始めてご先祖のお墓にお参りすることが出来る。又うるさい艦上機が来て、今日は二度も空襲警報が出た。

八月十五日 朝、早起きして、裏の島にげんのしょうこを取りに行った。とてもたくさんあったので、一時間ばかりで風呂敷に二包みも取れた。十時頃祖母がいらして、夜、家に仏様を拝みに来て下さいとおっしゃった。岸さんで、正午に玉音の御放送があるからと教えてくださったので、謹んで拝聴に行った。ラジオが

はつきりしなかったので、ただただ、有り難く頭を垂れていたが、次の内閣告諭によって、始めて休戦の大詔であることを知った。ああ、昭和十二年以来をして十六年十二月八日からの大東亜戦争、たくさんの兵隊さんが、同胞が尊い命を皇国に捧げて戦った目的は、達せられなかったのである。口惜しい。どうしてよいやらわからない感情に胸が一杯になった。最後の一人までたたかいたような気もするが、それでは、国体の維持が出来ないのである。陛下の仰せの通り私共は、耐え難きをしのいで、国体の護持の為つくさなければならぬ。さしあたり私たちは何をなすべきか。どうしてよいのか、わからない。早く、学校に行って先生方のおっしゃることをお聞きしたいと思う。

八月十七日 妹が、海にいきたいと言うので、朝から手筈をととのえて、早おひるをたべて晩のお弁当を持って出かけた。流木を拾い、海水を取り、街道でよもぎをつむという、よくばった考えが主で、妹の海水浴は、おそえもののようなものだ。二時ころあちらについて、三時半頃まで海で遊び、それから、たきものを拾って五時頃海岸でお弁当を頂き、五時半頃出発して、街道を、よもぎをとりとり帰ってきた。帰宅は七時少し前であった。

八月十九日 朝、(二之町の)祖母と伯母が山にたきものを取りに行くときそいに来た。母も行って十時頃までに相当取ってきた。明子をお守りしながら、モンペを作る。午前中大分はかどったが、できたのは、矢張り午後になった。一週間あまりのお休みも今日で終わった。とりたてて大きな仕事はしなかったが、小さな雑用をしたので、学校が始まると困ると母が言っている。

《先生評》 国民たれ。皇国女子たれ。今ぞ伏して詫び奉るのだ(天皇に〓樋川)。そして、希望期待を持ってこの荆の途を切り開くのだ。

八月二十日 第二学期の始業式が、新しい事態の下に行われた。校長先生から色々お話があった。要点は第一に承認必謹(何だかむずかしいことが書いてあるけど、要するに、終戦の詔書の意味を謹んでよく守ろうとの意〓樋川) 国体の維持に力を合わせることであり、第二に科学力を増大し、また国民的道義心を高めて、ちかかって、この仇をうたねばならぬということであった。私たちは、先生のおっしゃる言葉をよく守り、そして、今後進駐軍がくれば、心に思っても言い得ない先生のお胸のうちをさっして必ず新日本を立派に建設しよう。私たちの時代に出来ないならば、次の子らに崇高なる

団体精華を教え込んで喜んで建設の捨て石となろうと決心をした。

八月二十二日 毎夜、七時の報道を祖母の家に聞きに行っているのだが、今夜は、進駐軍の本土上陸具体案が発表された。それによると、彼らは先ず二十六日空から、二十八日に艦船をもってやってくるそうだ。いよいよ彼らの汚れた足が、神国日本の土をふみにじる時が近づいた。今さらのように、敗れたりの感が深くなった。

八月二十三日 学校にて、歴史の時間にも、家事の時間にも、日本の兵隊さんが支那で、どんな不道徳なことをしてきたかを知り、暗然とした。正義道徳のすぐれた軍隊と信じていた日本軍でさえそのようなことをしていたのであれば、ましてや彼らは何をするかかわらない。大和民族を絶やす為に、混血児を作ることやるかも知れない。わたしたちは、どんなことがあっても、皇国の女性たることを忘れてはならない。立派な態度をとりたい。しかし、その時の態度、どうあるべきか、先生のお話しをお聞きして、わたしにはわからない点があります。鹿兒島藩の女性ののように、私たちは、生きてはすかしめにあうよりは死んだ方がましです。しかし、苦しみに耐えて生きぬけとの大御心

(天皇の心〓樋川)に副い奉るには、ドイツ婦人に学ぶべきでしょうか。このようなことがわからないでと仰せられるかも知れませんが、どうぞお教えくださいませ。

《先生評》 純潔を尊ぶ我が国婦人の道は一つです。敵の妾婦となるよりは、むしろ自決するべきです。自決する時は、そう多くはありません。最後の土壇場ですから。大御心は決して民族が、混血になっても言うものではありません。

(注)日記は常用漢字、現代かなづかいになおした。

(ひかわ みちこ・茨城真龍ヶ崎市入地町二五五―六)

